

2024/7/14

ルカの福音書 講解メッセージ⑭

『ルカの福音書 6章 1-16節 律法主義と戦う』

■律法主義と戦う

「ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたとき、弟子たちは麦の穂を摘んで、手でもみ出しては食べていた。すると、あるパリサイ人たちが言った。「なぜ、あなたがたは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」

(ルカ 6:1-2)

パリサイ人たちは、弟子たちが律法の行いの規定に反していると言ってさばいています。人をさばくとは、自分の心の中の「～でなければならない」という規定に反する人を否定することです。ひとりひとりが自分の中にある規定に照らし合わせて、自分の行いや人の価値を判断しています。この「ねばならない」という思いが律法なのです。

ですから、これから語られるイエス様のことは、パリサイ人に対してだけではなく、このような規定を持つ私たち全員に対して語られているのです。

「イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、ダビデが連れの者といっしょにいて、ひもじかったときにしたことを読まなかったのですか。ダビデは神の家に入って、祭司以外の者はだれも食べてはならない供えのパンを取って、自分も食べたし、供の者にも与えたではありませんか。」(ルカ 6:3-4)

イエス様は、ダビデがひもじかったとき、祭司以外は食べてはならないと定められているパンを取って、自分と供の者に与えたことを例にして、律法よりも大切にしなければならないのは愛だと語られました。イエス様は、もっとも大切な律法は何かということについて、次のように教えておられます。

「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどのように読んでいますか。」すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽く

し、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

(ルカ 10:25-28)

イエス様は、律法のおきては愛することが第一であって、そのために細かい規定があるのだと教えておられるのです。愛よりも優先されるものはありません。

パリサイ人たちに対して、弟子たちがひもじい思いをしている時、食べ物を食べさせるのと、律法だからと言って食べ物を取り上げるのと、どちらが愛にかなっているかということイエス様は問題にされたのです。

「そして、彼らに言われた。「人の子は、安息日の主です。」」(ルカ 6:5)

安息日とは、主を礼拝する日です。イエス様は、ご自分が主であり、私を礼拝する日だと言われたわけですが、パリサイ人たちに理解できるものではありませんでした。

「別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに、右手のなえた人がいた。そこで律法学者、パリサイ人たちは、イエスが安息日に人を直すかどうか、じっと見ていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。」

(ルカ 6:6-7)

人を癒やすことも仕事として捉えられ、安息日にやってはいけないこととされていきました。そこでパリサイ人たちは、イエス様を訴えるために、安息日に人をいやすかどうかをじっと見ていたのです。このことから、彼らの心の中には、イエス様に対する怒りがあったことがわかります。律法は怒りを生み出すのです。

私たちは人に対して怒りを覚えると、相手が悪いと思います。しかし、そうではありません。自分が持っている律法が問題なのです。相手が問題なのではなく、律法が怒りを生じさせているのです。

「イエスは彼らの考えをよく知っておられた。それで、手のなえた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は、起き上がって、そこに立った。イエスは人々に言われた。「あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どうですか。」そして、みなの方を見

回してから、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、彼の手は元どおりになった。すると彼らはすっかり分別を失ってしまって、イエスをどうしてやろうかと話し合った。」(ルカ 6:8-11)

イエス様は、安息日にしてよいのか良いことか悪いことかと尋ねられました。もちろん良いことです。しかし、彼らは答えませんでした。そして、彼らの怒りは敵意に発展し、最後はイエス様を十字架につけて殺してしまうというところまで発展していくわけです。

■怒りはどうして生じるのか

このときのきっかけは、穂を摘んで手でもんで食べるという小さな行いでした。私たちは、人の行いを見て、自分が持っている律法に違反していたら、それに対して怒りを覚えます。その怒りがだんだん大きくなって、敵意になり、最終的には殺害に至るのです。これが、殺意のからくりです。つまり、問題は、私たちが持っている律法なのです。

律法はどのように生まれるのでしょうか。私たちは、誰もが「ねばならない」という律法を持っています。それは、愛されたいという願いがあるからです。人から愛されたい、良く思われたいと思ったら、相手の期待に応えるしかありません。ですから、相手の期待がそのまま律法になります。律法を持つと、それに違反する人を見ると、それが自分であっても、人であっても、腹が立つようになります。こうして、律法で人の価値を判断するようになって、人や自分をさばくようになるのです。周囲からの期待は実にたくさんあって、私たちは無数の「ねばならない」という律法を持っています。

私たちが、「愛されたい」という願望を持っているのは、愛される喜びを知っているからです。ところが、愛される喜びを知っているにもかかわらず、それが確認できなくなったので、必死になって愛されようとするのです。

これを少し説明すると、私たち人間は神のいのちによって造られています。神のいのちの息が吹き込まれて人が造られました。つまり、私たちを支えているのは、神のいのちであり、私たちは神によって愛され受け入れられています。ところが、悪魔の仕業で、人は罪を犯し、死が入り込みました(創世記3章)。死というのは、神と私たちを分断する隔ての壁です。死が入ったとたん、アダムとエバは神に愛されている自分が認識できなくなりました。自分のうわべしか見えなくなって、神に愛され支え

られている自分の内側がまったく見えなくなったのです。こうして人は、愛される喜びを知っているにもかかわらず、神の愛が認識できなくなり、愛されたいという願いを持つようになりました。

自分のうわべしか見えなくなったアダムとエバは、自分たちが裸であるということを知り、いちじくの葉で、腰の覆いを作りました。これは、少しでも自分をよく見せて愛されようとする行為です。死が神と私たちを分断し、愛されたいという願望が生まれ、どうすれば愛されるかを目指して生きるようになったため、人の期待がそのまま自分の中にねばならないという律法になったのです。聖書は、私たちの中に死が入り込んだことが罪となって、神との分離が起き、その罪の力が律法になったと教えています。

私たちが、愛されたいと願うのは、本来愛される喜びを知っているからです。死を恐れるのは、生きる喜びを知っているからです。私たちが目指すものは、すべてその反対の力があるからその方向に動くのです。

私たちはこの地上で一生懸命愛されるものになろうとします。そのために、この社会が望んでいることに対して「ねばならない」という律法を持ち、人から愛されるために、親や友達の期待を「ねばならない」という律法にします。そして、その律法を持った途端、その律法で自分の価値を判断するので、それに到達していない人を見ると裁くのです。つまり、人が悪いのではなく、律法が敵意を生じさせ、律法が怒りを生じさせているというからくりになります。人間関係において怒りを覚えるのは、相手が悪いわけではなく、自分が持っている律法が問題なのです。律法が変われば見方も変わります。

■律法について

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」

(ローマ 4:15)

怒りは律法によって生じるということです。私たちの敵は、相手ではなく、律法です。だから、イエス様は律法の考え方と戦ったのです。イエス様が戦ったのは、パリサイ人ではなく律法です。イエス様は、この律法を終わらせるために、この世に来られました。罪を取りのぞき、私たちが人を愛せるようにするために、律法を廃棄するために来られたのです。

「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」（ローマ 10:1-4）

「救われる」とは、神によって義とされることです。「自分自身の義を立てる」とは、律法を守ることを通して、自分を正しい人間だと証ししようとするということです。しかし、神の義は、行いとは関係なく、信仰によって救われるものです。彼らは、この義に従わなかったのです。

キリストが律法を終わらせたとは、行いによっては誰も救われないということをはっきりさせたということです。キリストが律法を終わらせたのですから、律法によって愛されようとするのは無駄です。信じるとは、神により頼む、神の呼びかけに応答するということで、それによって誰もが行いに関係なく、義と認められるのです。イエス・キリストが律法を終わらせた方法、それは十字架によってです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

そもそも私たちが律法を持つようになったのは、自分が愛されていることが確認できなくなったからです。その結果、私たちは愛される喜びを手にしようとして生きているのですが、この地上で愛を手に入れるためには、それぞれに求められる条件を満たさなければなりません。ここに律法が成立しました。ただし、その律法を通して人をさばくので、怒りが生じて、敵意が生じるのです。これをやめさせるためには、無条件で愛されることを知るしかありません。そうすれば、愛されるための律法は不要になります。それがイエス・キリストの十字架です。

イエス様は、私たちが罪人であっても関係なく、私たちのために十字架で死んでくださいました。あなたが罪人であっても関係なく、無条件で愛していることを伝えるものが十字架です。

こうして私たちは、キリストの十字架を通して、本来知っていた愛を初めて確認することができるようになりました。その愛を確認し、イエス・キリストによって、永遠のいのちを手にするのだと分かった時、律法による義は不要になりました。この世

界でいくら人から愛されても、永遠のいのちを手にしなければ何にもなりません。そのいのちは、イエス・キリストを通して、信じる者には誰でも与えられるということを、私たちは知りました。

こうして、律法は廃棄され、律法による生き方は終わり、怒りも敵意も生じなくなるのです。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人を造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」(エペソ 2:14-16)

こうして神と私たちは一つになりました。一つになることで、私たちが勝手に持ち込んだ律法を終わらせたのです。この律法が、私たちを、人を愛したくても愛せなくさせていたのです。

人は神のいのちによって支えられているので、本質的に愛したいという思いを持っています。それが律法によってふさがれ、律法を達成した人しか愛せなくなっていました。そして、そのために人を憎み、蔑み、争い、後悔することを繰り返しています。つまり、自分たちが作り出した律法が、自分たち自身を苦しめていたのです。しかし、律法が廃棄されて、私たちの中に愛したいという願望が素直に出ると、私たちは人を愛せるようになります。つまり、無条件で愛されているというキリストの十字架の愛を知れば知るほど、私たちの中から律法が廃棄され、本来私たちの中にある、愛したいという願望が、表に出るようになっていくということです。ここに、私たちを苦しめている罪の問題の解決があるのです。

■律法の役割

律法がこんなにも私たちを苦しめているというのに、なぜ神様は私たちに律法を与えたのでしょうか。そもそも、そんなものを与えなければ、人は苦しむこともなかったのでしょうか。律法を終わらせるなら、最初から与えなければよかったのではないのでしょうか。

「とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰（イエス・キリストの真実 *聖書協会共同訳はそのように訳す）によって、信じる人々に与えられるためです。信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」（ガラテヤ 3:21-24）

律法には二つのルートがあり、死が入り込んだことで持つようになった律法と、神が私たちに与えた律法があります。どちらも、ねばならないという考え方ですから、同じ律法としてとらえがちですが、神の律法は非常に厳しく、守れる人は誰もいません。神の律法の狙いは、全員を罪の下に閉じ込めることだからです。罪とは、自分の弱さ、不足のことです。

私たちは、自分の不足や弱さに気づけば、「神様、助けてください。」と、神に助けを乞うようになります。これを信仰というのです。こうして、神に助けを乞うことで、誰も救われるのです。

つまり、神が私たちに律法を与えた目的は、自分の義を証しするためではなく、自分の不足に気づかせるためなのです。自分の不足に気づけば救われるとは、なんと素晴らしいことでしょうか。自分にできることに気づき、神の前にそれを誇ることで、報酬としていのちを得るのではありません。自分のできないことに気づいて神に助けを求めれば、誰でも神からの恵みを受けることができるのです。神が律法に人にはできない高いハードルを設定されたのは、私たちが、自分が罪深い人間であることに気づき、神の恵みを受ける者となるためです。ところが、パリサイ人たちは、その律法を、人を裁くために使ってしまったのです。

■十二弟子を選ぶ

「このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。すなわち、ペテロという名をいただいたシモンと

その兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと熱心党员と呼ばれるシモン、ヤコブの子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。」(ルカ 6:12-16)

イエス様が、十二人の弟子を選びました。ここで大切なことは、弟子に優先順位がつけられたわけではないということです。この当時イエス様には数百人の弟子がいたと言われていますが、十二人の使徒が他の人より偉いということではありません。

ともすると私たちは、行いによって人の偉さをはかり、優先順位をつけたがります。しかし、神の前ではそういうことは問題になりません。なぜなら、私たちはキリストのいのちを共有している者であって、ひとつの体に属するものであり、いのちに優劣はないからです。人は、見た目の能力の差によって比較し、偉いか偉くないかをはかりますが、それは間違いです。

残念なことに、十二弟子は、この後、自分たちは偉いのだという錯覚に陥り、お互いに比べあって、誰が一番偉いかを競い合うようになっていきます。しかし、それは大きな間違いであることを、イエス様は、何度も教えておられます。たとえば、次のようなたとえ話があります。

ある農園では、日当1デナリの約束で、朝から働いている人たちがいました。その後、昼と午後3時と夕方から、それぞれ働きに来た人たちがいましたが、賃金をもらう時間になると、主人は最後に来た人から順に1デナリを渡しました。朝から働いていた人は、さらに多くもらえることを期待しましたが、やはり1デナリでした。この人たちが文句を言うと、主人は、「私は約束通り、あなたの分を支払った。ただ、最後に来た人にも同じだけあげたかっただけだ。自分のものをどう使うかは私の自由じゃないか。」と言ったのです。これが神の国の考え方です。

神の国というのは、永遠のいのちの国です。私たちは皆、永遠のいのちを持っています。つまり、あなたの人生の分母は、永遠になったのです。永遠という分母から見ると、8時間働こうが1時間働こうが、差はありません。地上では、高い山や低い山の区別がつきますが、月から見るとそのような区別はつきません。遠くから見れば見るほど、違いはわかりません。永遠という分母を手にした時点から、有限の世界で生きた時間は点でしかなくなってしまうのです。

ところが、私たちはいつまでも自分が生きてきた人生を分母として見ています。自分の人生の分母が永遠のいのちになったことをわきまえ知っておかないと、いつまでたっても苦しみから逃れることはできません。あなたの人生の分母が永遠になったということは、あなたは無条件に愛されているということです。そうすると、律法からも解放されます。すべてはイエス・キリストの十字架がなしてくださった御業です。